

## 〈研究ノート〉

# 作文授業における推敲

小山 真理\*

## Revising in a Composition Lesson

Mari Oyama

**要 旨** 作文の授業では、学生の書いたものを教師が添削するのが普通である。しかし、筆者の経験から、それだけでは学生の作文力は伸びないと考え、一部を自己訂正させるという添削方法をとってきた。だが、その方法にも限界があるため、今回は添削前に学生自身が自分の作文を添削する「推敲」を授業に取り入れ、学生の反応をみた。

キーワード 推敲 作文 削除

### はじめに

日本語の授業では作文を書かせることが多い。その場合、学生の書いたものを教師が赤ペンで添削し、評価やコメントをつけて返却するのが普通である。しかし、それだけでは学生の作文力は伸びない。その方法では、学生は受身のままで、自分で考えるという力がかからないからである。そこで、筆者は以前より、添削する際、学生が自分で考えて直す部分を残して添削をしてきた（小山，2004）。それはそれなりの効果があると思われるが、受身の部分が多いことに変わりはない。そこで、今回は教師が添削する前に、学生自身が自分の作文を添削する「推敲」に注目して授業の中に取り入れ、1年の最後に行う授業アンケートに「推敲」の授業についての質問項目を設け、学生の反応を見た。

### 1. 対象学生と導入方法

対象は2005年4月からの通年科目「日本語 I B」を受講した服装学部と造形学部の1年生44名中、後期の「推敲」の授業を受けた38名で、うち再履修生や編入生、聴講生など9名の上級生を含んでいる。導入は前期の最後の授業で行い、夏休みの課題として提示した。

まず、『朝日新聞』と『東京新聞』より抜粋したA～Dの4パターンの投書を読ませた。Aは「日本での勉強もう迷わない」という中国の留学生の投書で、「決意・決心」を表明したもの。Bは「新しい経験が楽しめる留学」というフィリピンの留学生の投書で、「留学の勧め」をテーマにした

---

\* 本学助教授 日本語教育

もの。Cは「伝統を継ぐ心うらやましい」という韓国の留学生の投書で、「日本と自国との比較」を書いたもの。Dは「目立つことが個性ではない」という韓国の留学生の投書で、「日本人を見て疑問を感じ、問題提起」した文であった。以上の投書を参考に、マインドマップ方式で書きたいテーマを自分で決め、自分の意見のあることを条件とし、400字以上760字以内、文体は「です・ます体」で書くこととした。その指示をする際、「推敲」については触れなかった。

夏休みが明け、作文を提出した翌週に「推敲」の授業を行った。導入として中国の故事を紹介し、推敲の語源を伝えたのち、高等学校用の教科書『国語表現』より抜粋した推敲の定義と推敲の着眼点を示した。その後、推敲前と推敲後の文を提示（資料1）し、実際にどこがどのように変わっているかを、各自比較させ、教師が添削するように推敲前の文に赤ペンで記入させた。さらに、悪文と言われる文を読ませて、読みにくい文、長い文をどのように直せば読みやすくなるかを考えさせた（資料2）。最後に、「理由」のない文とある文を比べさせ、「理由」のない文は意見文ではなくて感想文になりがちであることを理解させた（資料3）。

以上の作業をさせたあと、夏休みに書いた作文を返却し、30～40分程度の時間の中で、各自自分の作文を推敲させた。

## 2. 推敲の際の注意点について

推敲させる際、もとの原稿は消さず、直したほうがいいと思うところを、色のついたペンで直すよう指示した。しかし、何をどこからどのように直せばいいのかというのがわかりにくいと考え、まず最低限注目すべきポイントを以下のように板書した。

- 1 400字以上760字以内か
- 2 です・ます体になっているか
- 3 意見やその理由があるか
- 4 テーマは1行目、名前は2行目など、原稿用紙の使い方は正しいか
- 5 話し言葉を使っていないか

例) ×ないです→ありません                      ×行かないです→行きません  
      ×けど    →けれど(も)／～が            ×てる            →ている  
      ×よ・わ・ね(終助詞は使わないこと)

さらに、授業で読んだ本文中の推敲の着眼点をもう一度読ませ、その手順に従って推敲するように指示した。以下がその手順である。

★推敲の練習をするためには、次の順序で行うとよい。

- ①まず、一字一句に注意しながら、全体をゆっくり読む。自分で書いた文章だから内容がわかっているため、つい欠点を見落としがちになる。
- ②誤字・脱字はないか。句読点(。、)やカギ括弧(「」)、その他の符号の使い方はよいか

に注意する。

- ③語句の選び方の適切でないものはないか、使い方は誤っていないか、同じような表現、重複した表現はないかに注意する。
- ④文の中で、主語と述語、修飾語と被修飾語は、きちんと照応しているかに注意する。
- ⑤文章の文脈は筋が通っているか、段落の立て方はよいか、段落相互の関係は論理的に筋が通っているかに注意する。
- ⑥書こうと思った主題が、全体として必要かつ十分に書き表されているかどうかを、最後にもう一度ゆっくり読み返しながら、確かめる。
- ⑦不必要な箇所や語句は、思い切って削る。こうすると、引き締まった、よい文章になる。あえて言えば、推敲の着眼点の中では、削るということが最も重要だとすら言える。文章をたくさん書きこなしてみると、このことの意味がおのずから理解できるようになるであろう。

『国語表現 改訂版』三省堂より抜粋

以上の手順を確認して、推敲作業を終えたのち、自分で推敲した作文を改めて清書させ、推敲した作文と一緒に提出させた。推敲の清書は教師がさらに添削し、返却して最終的にはスピーチとして発表させた。

### 3. 学生の推敲の傾向

まず、推敲直前に示した、最低限注目すべきポイントについては、ほとんどの学生が訂正しており、特に目立ったのは「です・ます体」への訂正であった。「話し言葉」の訂正については、ふだんより作文には使わないよう厳しく言っていることもあり、最初から話し言葉を使用していない学生も多かったが、推敲によって正しく直す学生も数名いた。

2. で示した着眼点①～⑦についてであるが、②の誤字・脱字・ひらがなを漢字に直すなどの訂正が多く見られ、見落としがちな「句読点」の追加、削除などの訂正も4割の学生が行っていた。また、③～⑥のすべてにかかわることであるが、⑦の「不必要な箇所を削る」という作業については、5割以上の学生が行っており、特に大幅な削除をしたものが3割以上もいた(資料4)。もちろん、ただ削除するのではなく、新たな追加や変更を伴うものがほとんどであった。また、大幅でなくても、多くの学生は文法や語句の訂正を含む一部の削除や追加、変更をしていたが、2割の学生はほとんど訂正変更を行っていなかった。その内容を確認すると、訂正の必要がない作文が大半であり、推敲を理解していなかったわけではないと思われる。

田中(2005)は、推敲の講義をした学生としない学生を比較し、講義をした学生のほうが、追加文が多かったと述べている。今回の授業ではそのような比較考察はできなかったが、推敲の授業を行って動機づけをしたことにより、多くの学生が積極的に自分の作文に手を加えたことが認められた。

#### 4. アンケート調査より

1年の最後にアンケート調査(資料5)を行った。教材の難易度や印象度、スピーチ、マイクを使った音読、作文の添削と評価方法などの質問項目の中に、推敲の授業についての項目を設けた。以下、記入のなかった1名を除く37名の有効回答をもとに考察する。

まず、「推敲についての授業を今まで受けたことがあるか」という質問に対し、「ある」と答えたのは37名中15名、「ない」と答えたのは21名、回答しなかった者が1名で、初めての経験であったとする学生が多少多かった。しかし、日本語学校での授業において、「推敲」という項目だてをして授業を行うとは限らないので、学生の認識の中ではしたことがない、という場合もあると思われる。ただ、一般的には読み直しの指示をする程度の指導であることが多い。

次に、「推敲をしてみてどう思ったか」を自由に書かせた。複数回答であるが、一番多かったのは「難しかった」という答えて、「どこが違うかわからない」「自分の作文を直すのは苦手」「書きにくい」という記述も入ると11名、次いで「違うところが多くて驚いた」が9名、「よりよい文章になった」「わかりやすくなった」とした学生が6名であった。全体的に「いい経験になった」「自分で直すという作業はいい」「役に立った」とプラス評価をしている学生が4割以上おり、「推敲の大切さがわかった」「同じ意味の文も他の表現でもう一度考えるようになり、勉強になった」と言う者もいた。しかし、中には「何度読んでも間違いがみつからない」「あまり興味がないし、不必要だと思う」「覚えていない」とマイナス評価をした学生も4名ほどいた。このように、一部の学生ではあっても、推敲の必要性を感じさせなかった原因の一つに、教材の問題があると思われる。今回は高校で使われている様々な出版社の『国語表現』をベースに教材を作成したが、日本語力に自信のない学生には少し難しかったかもしれない。推敲という目的を達成する前に、教材理解の段階でやる気を失った者もいたようである。

また、「推敲の授業のあと、自分で自分の作文を推敲するようになったか」という質問に対し、「なった」と答えたのは約7割、「ならなかった」と答えたのは2割強の10名で、回答のなかったものが1名であった。問題はこの「ならなかった」と答えた10名である。アンケートの際、「推敲するようにならなかった理由」を自由に書かせたが、その理由はいくつかに分かれていた。まず、推敲授業の経験があると答えた学生は10名中3名、ないと答えた学生は6名、不明は1名であった。そのうち4名はコメントの中で「間違いが多くて驚いたので今後は注意しようと思ったが推敲は難しい」「推敲によって自然な表現にできて驚いたが、推敲の作業は辛くて実践できない」「いい経験になったが、面倒だ」「もっと推敲の練習をしなければできないと思うが、初めての経験で楽しかった」と述べ、推敲の有効性を認めながらも実践できないというものであった。また、「推敲を気にするような作文を書かなかった」「推敲には興味もないし、不必要だと思う」という2名を除く残りの4名は「文法ができないからいい文も書けないし直せない」「どこが違うかわからない」「習慣にないからできない」「まぎらわしいし、慣れない」などと述べ、推敲以前に文法力、日本語力に自信がないことが問題であると考えていた。

最後の質問「推敲する能力を高めるためにはどうしたらいいと思うか」のところで、上記の4

名のコメントを見ると、「文法、表現の勉強をするべき」「日本語力を高めなくてはだめだ」とあり、このような学生は授業で扱った本文も負担であった可能性がある。より理解しやすく、学習者の日本語力にあったもので、しかも、推敲に興味のもてる教材が必要である。また、これも複数回答であるが、最後の質問から、推敲能力を高めるために、学生が必要だと考えていることが見えた。当然のことであるが、「推敲の練習をする」「ゆっくり読んで考える」「内容のつながりを考えながら読む」が11名、これに「自分の文を繰り返し読む」「時間を置いて、または時間をかけて何回も読む」などの9名を加えると20名おり、推敲の授業の意味を理解していると思われた。次に多かったのは「本、新聞、他の人の文を読む」で13名、「文法、表現の勉強」が9名、「たくさん書く」が6名であった。中には具体的な練習方法を記述したものもあった。それは、「全体→局部→全体の目線で読む」「同じ文でも他の言葉に変えて書いてみる」「自分が書いたことを2回以上書き直してみる、それで自分で3回ぐらい読んでみる、あとは他人に1回ぐらい読んでもらう」というものであった。特に最後の「他人に読んでもらう」というのは協働作業の一つであるが、今回のようにスピーチで発表して、全員でシェアする前の推敲段階で、他人に読ませるという練習を組み込むのは、学生同士の意識にも変化が生まれるのではないかと期待できる。これらのコメントは今後の教材改訂や授業の進め方に、大いに参考になった。

## 5. お わ り に

最初、推敲の授業を行う前は、果たしてどのくらいできるのかと疑問であった。しかし、実際に推敲させると、思った以上に削除、追加、変更を行う学生が多く、推敲の授業の効果を実感することができた。また、アンケートのコメントからもわかるように、推敲の授業はおおむね好評であったと言える。ただし、アンケート調査からも見えたように、文法力、日本語力に欠ける一部の学生には、推敲自体が難しいということがわかる。今回対象にした学生は、4月のクラス分けの時点で日本語能力試験2級の「文法」のみを受けさせ、200点中120点以上を取った者たちであった。その成績と推敲内容を関連付けることは難しいが、感覚としてある程度日本語力のある学生でなければ、推敲能力も高めることができないのではないと思われる。つまり、同じ試験で100点に満たない学生たちに同じ授業を行っても、同じような結果が得られるとは思えないということである。また、推敲をさせてはみたものの、それはもちろん完璧なものではなく、学生自身が気づかない間違いも多くあった。今回は、どの程度の推敲をできるかをみるだけであったが、推敲前の作文と推敲後の作文の比較や誤用率などを調べる必要もあるであろう。

2005年度より、筆者は3年生の「日本語論文演習」を担当しているが、2006年度は学生のレベルがかなり高かったため、前期の授業で今回の教材を多少改訂して使用した。しかし、後期に入って夏休みの課題にしていた作文をみると、推敲作業を忘れていた者がほとんどであった。1回の授業で終わることなく、提出させる前に推敲する時間をとるなど、習慣づけが重要であることを感じている。推敲についての研究はまだ少なく、その有効性を数値に示すのも難しい。学生の性格や能力など、さまざまな要因によって推敲にも差が出ていると思われるからだ。今後は推敲作文の量的・質的分析とともに、日本語力に自信の持てない学生たちに対する推敲教材の開発が必要である。

## 参考文献

- 1) 小宮千鶴子 (1991) 「推敲による作文指導の可能性—学習者の能力を生かした訂正—」『日本語教育』75, pp. 124-135
- 2) 池田玲子 (2000) 「推敲活動の違いによる推敲作業の実際」『お茶の水女子大学人文科学紀要』53, pp. 203-213
- 3) 小山真理 (2004) 「日本語の作文指導に関する一考察」『文化女子大学紀要 人文・社会科学研究』12, pp. 75-88
- 4) 田中信之 (2005) 「推敲に関する講義が推敲結果に及ぼす影響」『日本語教育』124, pp. 53-62
- 5) 永野 賢 他編 (2004) 『国語表現 改訂版』三省堂
- 6) 小松寿雄 他編 (2005) 『国語表現Ⅰ』旺文社
- 7) 長沼行太郎 他編 (2005) 『国語表現Ⅱ』教育出版
- 8) 樺島忠夫 他編 (2005) 『国語表現Ⅱ』京都書房

## 資料1

### 推敲前

私は高校三年間、バスケ部に所属し、マネージャーをしながら勉強との両立を目標としてきた。その中で学んだことはたくさんあるが、特に、みんなとの協調性である。ふだんの練習の時も試合もそうだが、一人一人が自己主張したり勝手なプレーをしたら良いチームにはなれない。お互いのことを思いやる想像力が大事だと思いました。それはマネージャーの最も難しい仕事でもありました。

貴校の学風は「自立と強調」であり、バスケ部で学んだことをぜひ生かしてみたい。また、体育学部ではスポーツ栄養学を学びたいと思っている。そして未来は栄養士目指してがんばりたい。

\*この文は誤字を含んでおり、授業用教材では行間をあけてある

### 推敲後

私は高校三年間、バスケットボール部に所属し、マネージャーを務めてきた。その間、勉強との両立を目標としてきた。そこでは多くのことを学んだが、特に、部員同士の協調性の大切さを学んだ。ふだんの練習の時も試合の時も、一人一人が自己主張したり、勝手なプレーをしていたら良いチームにはなれない。お互いのことを思いやる想像力が大事だと痛感した。それは、マネージャーにとっても最も難しい仕事であった。

貴校の学風は「自立と協調」なので、バスケットボール部で学んだことをぜひ生かしてみたい。また、体育学部ではスポーツ栄養学を学びたいと思っている。そして、将来は栄養士を目指してがんばりたい。

## 資料2

悪文といわれるもののなかで、留学生がしがちなのは、一文が長すぎる文です。次の例文を三つに分かれる読みやすい文にしてください。内容が変わらなければ、順番を変えてもいいです。

来年ちょうど五十周年を迎える山仲間の会に私は所属しているが、南アルプスで、自分たちが存在した証<sup>あかし</sup>として何かしたいとの思いがあり、運よく会員の中から土地の提供者が現れたので、その地で山小屋を造ろうという話が始まった。

## 資料3

次の二つの例文を読み比べ、どこがどのように違うかを考えて、下の空欄に言葉を入れてください。なお、〔 〕には同じ言葉が入ります。

### 例文1

高校や大学を出ると、多くの人が職業に就く。ただし、近年、就職が厳しく、だれでも自分が望む職業に就けるとは限らない。希望する職業に就けないからといってフリーターとして働く人も多い。フリーターになって、自分の希望する職業に就けるチャンスを待つのだという。しかし、私はフリーターになるよりは、たとえ自分の望まない職業であっても定職に就きたいと思う。

### 例文2

近年、就職が厳しく、希望する職業にはなかなか就けない。希望する職業に就けず、結局フリーターとして働くという人も多い。誰でも自分が望む職業に就きたい。その職業を自分の天職<sup>てんしよく</sup>のように思い込むこともある。しかし、その職業が自分にふさわしいという保証はどこにあるのだろう。希望する職業に就けないからといって、フリーターとして働くというのは考えものだ。生活の不安定なフリーターになるよりは、たとえ自分の望まない職業であっても、生活の安定した定職に就くべきである。

例文1と例文2はどちらも「」に反対の立場から書かれた文章である。ただし、例文1は、反対であることについてとくに「」を述べていない。それに対して、例文2は「生活が不安定だからよくない」と「」をはっきりさせている。「」のない意見文は、単に自分の思いを述べた感想文のような印象を与える。逆に言えば、しっかりとした意見文であるためには、【】を筋道立てて説明できるものでなければならないのである。



## 資料5

4 「推敲」の授業について思い出してください。

① 推敲についての授業を今まで受けたことがありますか。 → ある・ない

② 夏休みの宿題作文を推敲してみて、どう思いましたか。自由に書いてください。

③ 推敲の授業のあと、自分で自分の作文を推敲するようになりましたか。

→なった・ならなかった

④ ③で「ならなかった」と答えた人は、その理由を書いてください。

⑤ 推敲する能力を高めるためには、どうしたらいいと思いますか。

自由に書いてください。